ミツバチ科学（2000）21(3)：125—129

壁土塗り竹籠養蜂
—島原地方に消滅寸前のニホンミツバチ飼育法を探して—

福田　道弘

長崎県島原地方（図1）に壁土塗りの竹籠を使ってニホンミツバチを飼育する方があると知ったのは1986年5月のことである．

その前年，1985年5月，ニホンミツバチとランの一種シンビジュームに属するキンリョウヘンとが分蜂期にくり広げる不思議な現象を初めて見聞した．それから一年間，この現象をニホンミツバチとキンリョウヘンの両方から調べようと文献などを漁った．しかし，当時ニホンミツバチに関してさえ生態などを科学的に研究，調査した結果を告げる文献を目にすることは難しかった．シンビジュームに関しては栽培法を伝える園芸書だけしか目にすることはなかった．調査上の進展は全くなかった．

1986年4月，玉川大学ミツバチ科学研究所（当時）へ電話をした．応対をしていただいたのは「ミツバチ科学」の編集に携わっておられた吉田忠晴先生（現玉川大学ミツバチ科学研究施設主任教授）だった．

キンリョウヘンがニホンミツバチを誘引しているであろう物質を抽出し，実用的な誘因剤を作るにはどの類の溶剤を使ったらよいかたずねた．後々知ったことだが，両者がくり広げる不思議な現象は，当時研究者にも知られていなかったのである．

日を措かず，同年5月，吉田忠晴，小野正人（当時大学院生，現玉川大学農学部助教授）両先生の調査のための訪問をうけた．ハチとランにかかわる現象については本稿のテーマではないので，「ミツバチ科学」9巻3号（福田，1988）を参照いただきたい．

八代での調査の後，両先生は長崎県島原半島の小浜温泉へ向かわれた．ニホンミツバチの変わった生息状況を調査のためである．誘いを受けたので調査に同行させていただいた．

このニホンミツバチの変わった生息状況については吉田忠晴先生の最近の労作「ニホンミツバチの飼育方法と生態」（玉川大学出版部刊，1999）に取り上げてある．

図1　長崎県島原地方．雲仙普賢岳を擁する島原半島を中心とした地域

小浜温泉での調査地から数百m離れた「よろこびの広場」の近くで中年の男性に会った．小浜町小田に住まわれる金子さんであった．ニホンミツバチについていろいろ話を聞いた．かなりの時間立ち話を続けた．そして飼育法，巣箱に話題が移った時どうしても解せないことを聞いた．

竹ヒゴを用いて円筒状の竹籠を作り外部に壁土を塗る．巣門は壁土の乾かないうちに竹ヘラで切り込みを入れ開ける．枝木などを十文字に結んで籠の内部，中央，中心に入れ支柱とする．円筒の上の開口部には別に稲藁で円座を作り蓋をする．この円座も壁土で塗り固め竹籠と一体とする．

分蜂群を見つけてから竹を伐り竹籠作りを始めることもあるという．壁土の生乾きの籠に分蜂群を納め飼育を始めることもしばしばだという．円座の下方にミツバチは蜂球を組み，巣作りを始めるという．

このような竹籠を用いたハチの飼育など見聞きしたことがない．吉田，小野両先生にとっても初耳の様子．しかし，この近辺ではニホンミツバチを飼うにはこの方法が普通に行われているとのことである．両先生のこの地での調査も済んでおり，この巣籠とも呼ぶべきものを探してみることになった．

車を走らせて，時折通行中の方や，作業中の方に尋ねたりした．小浜町から南東の方に位置する南有馬町の農家に入った．家族数人でメロンの選別，箱詰めをしていた．来意を告げると主人が近くにいた青年に納屋の中を探してくるように言いつけた．爺ちゃんが昔使っていたものが壊れているかもしれないが残っているだろうという．しばらくして青年が手ぶらで戻ってきた．整理をした時捨ててしまったようだとのこと．その日はそれ以上の成果はなく，宿題が残った．

島原半島通い

初めこの巣籠や飼育方法に強く興味を持ったわけではなかった．広くこの方法が普及していると聞いたので，島原半島に行く機会があれば一度は見てみたいと思っていたし，そのうちにいずれ見ることができるものと思っていた．

それから1～2年の間は島原半島を訪れる機会がなかった．その後，長崎，佐世保，平戸などへ車で行く機会があると，時間的には早く着く高速道路を走らず，島原半島経由のコースをとった．

ところが，捜しても，捜しても巣籠は見つからない．中年以上の方々の話では，昔はあちらこちらに見かけたということである．うまくいった話，失敗した話，採蜜の後の絞りかすの甘かったことなど懐かしそうに話してくれる．

しかし，巣籠どころかニホンミツバチの姿が見えない．北有馬町の山間のお堂の床下にいるという話を聞いただけだった．分布数が極端に少ないようである．それからも機会があれば島原半島通いを続けた．

1991年9月，雲仙普賢岳が噴火した．死者，行方不明者合わせて43人の犠牲者を出した．人だけでなく物的にも経済的にも大きな被害を出した．その後も島原半島通いは続けた．

多くの方々に巣籠のことを聞くうちにその全体像ともいえるものは見えてきた．この地で少年少女期を過ごした人々にとっては，野山や，農家の庭先に巣籠の点在する光景はふるさとの原風景ともいえるものだろう．20年くらい前まではいたるところで見られたという．その後の自然環境の変化はミツバチの生育を難しくしたのだろう．

このような方法によるニホンミツバチの飼育をやめ，セイヨウミツバチを大量に飼育するスタイルの養蜂に移行していった人たちも数人いたという．

島原半島の周辺でこの方法によるニホンミツバチ飼育の有無を聞いてみた．諫早市内では有．北高来郡高来町山間部でなし．大村市の山間部でなし．島原湾から，天草灘を隔てた熊本県天草地方になしであった．この巣籠によるニホンミツバチの飼育法の分布した地域としては島原半島を中心に，半島の付け根にあたるところまでといえる．

その形や使われた素材が他の地域のそれと大

きく異なることも興味をひいた．この巣籠のプロトタイプ（原型）ともいえるものについても多くの方々に尋ねてみた．ところが，そのようなものはなく，素材が竹と赤土と少しの稲藁，そして枝木なので，いずれも手近に得られるただのものばかり．自然発生的にできあがったのだろうとのこと．平板でも丸太でも手に入れるのにお金がかかるとのことであった．あげくは手本どころかショイカゴ（正油籠）そのものだとの指摘を何人の方々から受けた．

古来各地で正油作りは家庭で行われていた．桶やカメの中のもろみ正油と正油粕とを仕分けるときに使った竹籠だというのである．高さが3～4尺（約90～120cm），直径が1尺（30cm）ちょっと．巣籠として使うには高さを半分ほどにすればいい．直径はちょうどよい．正油用の籠だけではなく酢，酒造用などの醸造用に使われる円筒形の竹籠に手近にある壁土を塗りつけ

図2　並べられた巣籠．7籠中3籠を蜂群が利用中（1999年1月，長崎県北高来郡森山町本村名前山氏宅）

図3　巣門に出ている蜂．気温8℃，晴（図6と同日同所）

巣籠としたのだろう．

1998年12月，北有馬町原山で栽木の整理をしておられた高木彰治さんに声をかけた．若い頃の体験談を聞いた後，高木さんの知り合いの方のところへ連れて行ってもらった．畜産業を営んでおられる方だった．巣籠を使ってミツバチを飼っている人は知らないとのこと．昔話の後に昔のように籠を使ってミツバチを飼ってみるか，との話も出た．その後高木さんの親戚の家に寄る．ハチの話が出るが今は飼っていないとのこと．納屋の前の平べったい座布団ほどの広さの石の上でハチを飼っていたとのこと．

わずかに残る巣籠を発見

2000年1月11日，北有馬の高木彰治さんから電話を頂いた．以前から取引のあった方の家を久しぶりに訪問したら壁土塗りの巣籠が置いてあるのを見つけたとのこと．しかも遺物ではない，現役バリバリのものだとのことだ．

2000年1月29日，高木さんに教えていただいた北高来郡森山町本村名の前山定義さん宅を訪れた．前庭に7つの巣籠が置いてある（図2，3）．初めて目にする現物である．幾度となく話を聞いておりその姿などは充分に想像できた．しかし想像していたより大きなものだった．壁土の表面の所々に見えるスサ，滑らかな面の黒ずみ，台の大きな石，迫力がある．

7つの巣籠のうち3つからニホンミツバチが出入りしている．晴天の陽光を受けてはいるが12℃の温度でハチの出入りの数は少ない．巣門近くで少数のハチがたむろしている．

昼休みに農作業から帰られた前山さんに話を聞いた．7つのうち2つが伝統的な巣籠であとの5つは異なるものであるとのこと．

偶数本のタテボネと1cm巾にへいだ竹ヒゴを編み，直径40cm，高さ65cmほどの上下に開口部を持つ円筒を作る．赤土，田圃の土に稲藁を10cmほどの長さに切った「スサ」を混ぜ合わせる．それに水を加えてこね合わせて壁土を作る．円筒の内外面に厚み2cmほど，合わせて4cmほどその壁土を塗る．円筒の内部の真ん中に枝木などで十文字を作り全体の支えと

図4　島原半島で古来より使われてきたニホンミツバチ用の巣箱（籠）．竹籠の内外面に，赤土，田んぼの土，スサ（稲藁を5－10cmほどの長さに切ったもの）を混ぜ合わせた壁土を塗りつけたもので，底の石板とは壁土を使って接着固定してある．巣籠の上下中央に太い枝で組んだ十文字の支えがあり，この部分より上部の巣の蜜を採る．支えより下部はそのまま放置し，ミツバチによる再造巣を促す．

図5　天井をはずし下から覗いたところ．中央に十文字に組んだ木製の支えが見える

図6　巣箱の天井部（内側）は，天井板に藁縄製の円座を取り付けた状態になっている．写真のものは朽ちかけているので，これを新品に取り替えて巣箱を再利用する．この巣は赤土，田んぼの土にセメントを一握り混ぜ入れて作ってあり，表面が滑らかな印象である．また金網を芯として用い，強固で長持ちするようになっている．

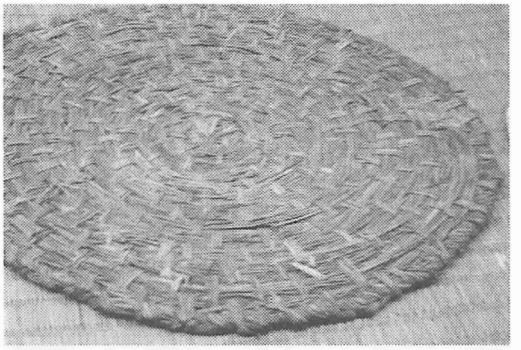

図7　円座は日本各地にあり，特に養蜂用の特殊なものではない．この写真は八重山でインチャと呼ばれる円座．このような円座が，分蜂をとらえ，竹籠の中で巣の付着部として利用される．

する（図4，5）．

別に10cm～15cm四方の平板に1cmくらいの丸い穴を格子状に開けたものを作る．円筒最下部につけ巣門にする．

円筒の天井にはまる蓋は別に作る．直径1cmの藁綱をなう．中心より外周に向け螺旋状にかたく巻いてゆく．円座である（図6，7）．

分蜂群を見つけるとこの円座を差し出し，それを移す．準備してある巣籠の蓋にする．全体を平べったい石の上にのせる．各々のすき間には柔らかい壁土を塗り，全体を一体として仕上げる．外部と内部の出入り口は巣門だけとなる．

それまでに聞いていた作り方と前山さんの作り方に少し異なった点があった．巣門の作り方，巣籠の内部への壁土塗りの有無である．

採蜜は5月頃行い，平均して1升ほどの蜜が採れるとのこと．以前，メロンを栽培した時花粉交配用にニホンミツバチを使った．20～30cmはある巣籠を息子さんとトラックに乗せハウスまで運んだこともあるという．

以前近くに住んでおり，その後，隣町の北高来郡愛野町へ引っ越しをされた松山直さんから

巣籠，ミツバチを引き受け飼育を続けているとのこと．前山さん宅を辞して松山直さんの家を訪問してみる．夕方になり松山さんに会うことができた．

畑作地帯の中の現在地では農薬散布などのためハチを飼える環境にはなく残念だとのこと．土で作った巣籠は水滴など壁面で吸収するのでよい．採蜜は7月頃，風を吹きかけながら昼間行う．蓋を取り支柱より上の部分だけを採る，1升から1升5合くらいの収穫があった，などの話を聞くことができた．また，できることならミツバチを飼ってみたいとのことだった．

あとがき

多くの方々から，本当に多くの方々から話を聞かせてもらった．ミツバチの話をされるときの楽しそうな表情がそれぞれに思い浮かぶ．

巣籠を捜しだして数年経った頃，現物を見るのは不可能だろうと考えるようになった．とにかくニホンミツバチの姿が見えないのだ．巣籠が見られないのも当然だと思えた．

捜し始めて十数年の年数を要した理由に「初動捜査」の立ち後れがある．早い時期に精力的に捜せば現物をもっと早く見ることができただろうと思っている．

島原地方の民俗資料館に立ち寄って巣籠やそれに類するものを捜してみた．農具，漁具その他生活用品の類は数多く展示されていた．しかし，養蜂に関わる用具などを見ることはなかった．おじさん，おばさんたちにあれほど懐かしい昔を思い出せる養蜂の用具はその展示場には欠かせないものと思えるのだが．

今，まさに消えなんとするこの巣籠の話をすると強い哀惜の念をもたれる方が多いと思う．筆者は島原半島のニホンミツバチの生息数がきわめて少ないという現実を直視したいと思う．

本稿中「巣籠」を使ったが，地元でこれに相当する名前を聞くことがなかったので，筆者が便宜上用いたものである．ニホンミツバチもセイヨウミツバチもミツバチと呼ばれていた．

本稿中に名前を挙げた諸先生，賢兄の他に，国見町永島明，千々石町山本勇，小浜町出口賢郎，口之津町寺田千寿，北有馬町大島隆則，吉田義春の諸賢兄にも多くのことをご教示いただいた．

本稿の発表の機会を与えていただいた「ミツバチ科学」に感謝の意を表したい．

（〒869-5174　八代市二見下大野町 1920）

参考文献

吉田忠晴．1997．ミツバチ科学 18（1）：4.